氷河湾の印象

俵　浩　三

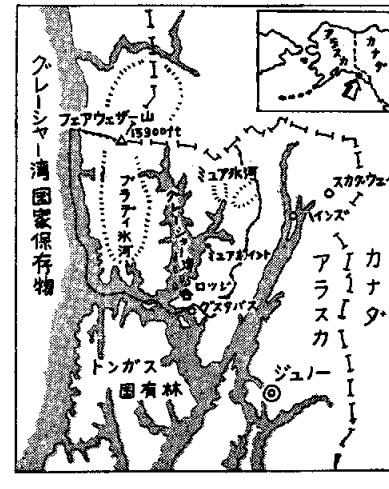
昭和四十八年の夏、私は国立公園協会が組織したスタディチームの一員として、アラスカからアメリカ西部の、十数カ所の国立公園などを訪ねることができた。どの地域でも優れた自然の風光と、そこを訪れる人たちの自然への接し方、そして国立公園などの管理のあり方に感心させられた。当時のメモを頼りに、グレーシャー湾（氷河湾）国家保存物の印象を記してみたい。

グレーシャベイ・ロッジ

グレーシャー湾国家保存物（Glacier Bay National Monument）はアラスカ東南部、州都ジュノーから飛行機で三〇分ほどのところにあり、面積約一一二万ヘクタール、アメリカでも最大級の原始境である。ジュノー付近の海岸は典型的なフィヨード海岸地形を呈しているが、海岸山脈に源を発する氷河が海面まで落ちこんでいる豪壮な風景を満喫できるのが、グレーシャー湾国家保存物である。グスタバスという小さな町に近いグレーシャー湾の入口、バートレット入江には、地域内唯一の利用拠点となるロッジがある。これより奥地には道路も山小屋も、売店もない。私たちはこのロッジに二泊し、中一日をグレーシャー湾の探勝にあてた。

フィヨードの入江に面しながらも、シトカスプルース（エゾマツの仲間）のうっそうとした森林の中に建てられたこのロッジは、切妻屋根の木造建築であるが、モダンな感覚でデザインされている。ロビー、食堂、管理部門を中心としたセントラルロッジの周辺に連棟式の宿泊ケビンを配し、それぞれが露天の渡り廊下で連なっている。この渡り廊下は宿泊客が森林内を勝手に歩くことを規制し、グースベリー、コケ類などの林床植物の保護に一役かっている。夜遅くこの渡り廊下を歩いていたら、白夜のたそがれの森の中に黒い熊の走り出る姿が見えたのでびっくりした。

晩さんの席にはグレーシャー湾国家保存物管理事務所のロバート・ハーウ所長と主任レンジャー・ナチュラリストのチャールス・ヤンダ氏がわざわざ同席してくれた。私たちのメンバーには国際的にも有名な千家哲麿団長をはじめ、全国自然保護連合の荒垣秀雄会長などがおられるので、行く先々でアメリカ政府機関の丁重なもてなしを受けた。ハーウ所長はグレーシャー湾について、いろいろなことを語ってくれた。この地域の年間利用者数は（シャトルなどからの上陸しない観光船利用を除き）僅か二万人程度であるが、レンジャーは二十四名いるという。国家保存物の多くと、国立公園は、ともに優れた自然地域であるが、国立公園の方が自然保護規制がき



びしい。グレーシャー湾には古くから、金、銅などの鉱区があるため、国立公園の保護基準に違していないが、近くその権利調査がつきそうなので、アメリカでも第一級の国立公園として、昇格される可能性がある、とハーウ所長は顔を輝やかしていた。ハーウ所長はグレーシャー湾の自然に魅せられ、内務省国立公園局からの栄転の話を再三にわたって断わり、生活の不便をも返りみず、この地域の自然保護につくしているのだという。

夕食後はロッジの中の講演室で、レンジャーによりスライドを使ったグレーシャー湾の自然解説が行われ、次の日に探勝する氷河や動植物の特長などの予備知識が与えられた。

定期船の案内をするレンジャー

翌朝は定期船にのり、グレーシャー湾の奥を探勝した。船は五〇人乗りくらい、けっして立派ではないが、がっしりしている。案内役として女性レンジャーの、カロリン・エルダー嬢が同乗し、とくにハーウ管理事務所長も同行してくれた。観光会社の定期船に政府職員が案内役として同乗するなどということは、日本的な常識からすれば企業べったりと批判されそうであるが、この定期船やロッジの経営は内務省国立公園局から特許を受けた、コンセッショナーとよばれる会社の経営である。どこの国立公園でも、原則として一公園一会社が特許を受け、公園内のホテル、キャンプ場、ガソリンスタンドなどを一手に経営している。独占的企業といえるが、経営サービスに対する政府の監督もきびしいという。どの国立公園でも、レンジャーとコンセッショナー従業員は一体となって、国立公園利用者に対するサービスに努めていた。

私たちのコースは、グレーシャー湾入口から、湾をさかのぼり、ミュア氷河を往復するもので、片道約八〇キロ、たっぷり一〇時間あまりかかる。知床岬への観光船に似たところもあるが、荒波の知床にくらべ、氷河湾は水鏡のように静かである。乗客も知床のように若者中心という華やいた感じはなく、中年以上の夫妻づれが多い。乗客は胸に名札をつけ出身州と名前がすぐわかるので、お互いに話のいとぐちを見つけやすい。名札をみると、ワシントン州の人がもっとも多く、次いでカリフォルニア州。ニューヨーク州やフロリダ州の人もいる。

船外の光景はいかにも荒けずりな大風景で、刻々と変わる箱庭的な変化はない。日本なら快速艇でも走らせなければ観光客が退屈してしまいそうであるが、ここでの船足はまことにゆったりとしている。しかし乗客は、誰一人として無りようをもてあそばず、それぞれが風景を楽しんでいるようである。

湾の中には昔の氷河のモレーンなどがとり残された小島がたくさんあって、海鳥の繁殖地となっており、無数の海鳥が乱舞している。レンジャーのエルダー嬢は、新しい種類の海鳥がみえるたびにその名前や習性を乗客に説明し、乗客もまた熱心にその話に耳を傾ける。私の手帳には、北極アジサシ、カナダシジュウカラガン、エトピリカ、ウミガモ類など英名で教わった鳥の名前が二〇種くらいメモされている。船内には双眼鏡と鳥類図鑑、植物図鑑、氷河湾の地誌、その他の参考図書も用意されていた。レンジャーは別に鳥類目録のチェックリストを持っており、その日に観察できた種類と場所などを克明にチェックしていた。日常のこのような観察資料が集積されることによって、この地域の自然誌が、より完璧なものになってゆくのだろう。

氷河の後退と植物の進出

船が進むにしたがって両岸の森林の様子が少しまばらになり、裸地が多くなってゆく。レンジャーのエルダー嬢は、ここでも興味ぶかい解説をしてくれた。このグレーシャー湾は、今日では奥ゆきが八〇～一〇〇キロくらいあり、その奥が氷河につらなっているが、二〇〇年ほど前は、いま船が走っているところは氷河でおおわれており、グレーシャー湾入口のロッジのあるところ、今日では立派なスプルースの林のあるところまで氷河が達していた。一七九四年、イギリスのジョージ・バンクーバー船長が、この付近の探検的航海を行ったときも、グレーシャー湾の存在はほとんど認められなかったという。しかし僅かな気候の暖化により、氷河は毎年後退をつづけ、二〇〇年の間にこの大きなグレーシャー湾が形成された。グレーシャー湾の中ほどにミュア・ポイントと呼ばれる地点がある。有名な自然保護の先覚者、ジョン・ミュアが一八九〇年、ここにベースキャンプを設けて付近を探検したところであるが、

当時はここが氷河の末端であったという。現在はこの部分から支湾が分れ、ミュア入江となっている。

このように氷河が後退すると、そこに裸出した地表には土壌形成と植物の進出がはじまる。グレーシャー湾では、この植物群落の遷移が、コケ、地衣類→チョウノスケソウ→ヤナギ、ハンノキ→スプルース→ツガ、という段階で観察できるという。そのつもりで両岸の植物をみると、たしかにこのような植生の変化が読みとれる。私たちはサタセッションの方向を逆行するように船をすすめたわけであった。私にとっては、サタセッションといえば駒ケ岳や十勝岳など、火山の爆発によって裸地となった裾野に森林が回復してゆく様子が連想されるので、氷河の後退によるサタセッションは意想外の現象であり、とくに興味ぶかかった。

豊かな海辺の動物

さらに進むと両岸に裸岩の断崖がつづく。レンジャーは、あの岩の上に山羊（マウンテン　ゴート）の一家族が群れている、とか、こちらのテラスにハクトウワシ（ボールド　イーグル）が休んでいる、とか親切に教えてくれる。山羊は白い点が岩肌を動くのが解る程度で細かい識別はできないが、ハクトウワシはその堂々たる体つきから表情まで、王者の風格が読みとれる。

オジロワシに似たこのハクトウワシはアメリカ合衆国のシンボルであり、ホワイトハウスの壁面から一ドル紙幣にまで、その雄姿がデザインされている。アメリカのハクトウワシは南方系と北方系があり、南方系はほとんど絶滅寸前であるが、北方系はアラスカ沿岸に相当数が生息しているという。もちろんグレーシャー湾国家保存物の区域内は、ハクトウワシにとっても安住の地であるが、グレーシャー湾の南に接するトンガス国有林（六四〇万ヘクタール）で、全米一の広さをもつ国有林）では国有林の多目的利用の一環として狩猟を認めているので、保護鳥であるハクトウワシの生息環境を守るため、ハクトウワシの営巣地（多くは老大木）が発見されれば、営巣地を中心とする半径三三〇フィートの範囲は自動的に保護区となり、伐採や狩猟が禁止される標識が掲示されることになっているという。

私たちの船からは何頭かのクジラが浮き沈みする光景もみえた。ここでもレンジャーが目ざとく発見し、乗客に教えた。ハンプバック（猫背クジラ？）といい、その生息数が少なく珍しい種類だそうである。ときどき水中に逆立ちし、尾びれをあらわす。そのうち、噴水のように潮を吹きあげたのでびっくりした。クジラでびっくりしたといえば、私はアンカレッジで国有林の係官から、国有林が発行したクジラの解説パンフレットをもらって面くらった。「海洋と森林」と題するものであるが「皆さんは〈森林〉」といえば、まず樹木のことを想うでしょう。しかし、国有林は樹木に関係するだけではありません。樹木は森林の一部ですが、そのほかに土や水、動物や空気などが集まって生きた社会をつくっています。そして国有林は、それらにふさわしく管理されています。……アラスカを知っている人なら、国有林を横切るハイウェイに、クジラやイルカ、タラゲなどがでてきても不思議とは思わないでしょう。それはハイウェイが、自然の海路を利用しているからです……」という意味の文を読めば、国有林とクジラという奇妙なとり合わせも、おのずから納得できるようになっている。

海に落ちこむ氷河

出発してから五時間ちかくたつと、いよいよ湾の奥深く入り、両側の岸壁はしだいにせばまってきた。岸の岩肌には明瞭な氷河さっ痕が幾条も記され海面には大小さまざまの氷塊がただよいはじめた。やがて氷塊があたり一面を埋めるようになり、正面に氷河の末端がせまってきた。気をつけてみると氷塊の上には、あちらにもこちらにもアザラシが寝そべっている。ちょっと見渡しただけで数十頭は下らない。船はエンジンを停め、静かに余力で進むと、アザラシは頭をもちあげてじっとこちらを見ている。乗客一同はかたずをのんで見まもる。しかし望遠レンズのついていないカメラのファインダーに、どうやらはいりそうな距離になると、アザラシはするりと海面にもぐってしまった。

最初にミュア氷河、つづいてリグス氷河へ船が近づく。海に臨んだ氷河の末端は高さ数十メートルの断崖となり、銀色と灰色の縞模様をえがき、ところによっては透き通るような青白さで大きな結晶のようになっている氷もある。あいにく雲が低く、氷河

の源をなす山々は見渡せないが、まさに静寂の原始境である。氷河はまったく静止しているようであるが、ごく僅かな動きにより断崖の一部はバランスを失い、氷塊となって海面に落下する。思いがけぬ大きな音が、あたりに響きわたる。私は自然環境からうける深い感銘に、しばらくは船の上に立ちつくしていた。

グレーシャー湾一帯は、とくに登山コースもないが、ここの原始的自然域をさぐりたい人は、レンジャーの許可を受ければ船をおりて、次の船が迎えにくるまで滞在することができるという。もちろん私にはその準備がなかったが、もし私がたった一人でここにおろされて一週間を過すとしたら、私は喜んで探検的登山を試みるだろうかと自問してみた。おそらく私は、仲間がいなければ、この原始的自然に圧倒され、身を小さくして恐れおののいてしまうだろうと思った。

帰りの船の中で

いよいよ船は同じコースを引き返すこととなった。帰りは行きのように未知の自然に対する緊張感はなく、乗客一同もくつろいだ雰囲気になる。船の中には軽食と飲み物のフリーサービスがあるので、思い思いに腹を満たしにゆく。私はテキサス州ヒューストンからきたブラムという名の家族づれと仲よくなり、ブロークン英語でもうちとけた会話を交すようになった。女子大生と小学生の男の子がいる。ポコ・ブラムという女子大生は美術が専攻で、日本の盆栽に興味をもっているという。小学生のミッチェル君は私のメモ帳を覗きながら、日本文は縦でも横でも書けることを発見し、目をまるくしていた。山、川、木など簡単な象形文字を図解して教えてあげたら、家族中が顔を見合わせて感心していた。

ハーウ管理事務所長は私の傍へきて、すさまじい「リツヤ湾事件」のようすを語ってくれた。一九五八年七月九日、フエアウエザー山西南麓のリツヤ湾では、三隻のトロール漁船が白夜の中で操業していた。フエアウエザー山にはカナダの山岳隊が登山中で、翌日おりてくることになっていたが、彼らは予定より早く下山し、小型機でキャンプ地を飛び去った。ところがその直後に地震が起こり、フエアウエザー山腹の断層に沿って地崩れが生じた。それは氷河をまきこみ、九千万トン、四〇万立方ヤードの土量となってリツヤ湾になだれ落ちた。その結果、リツヤ湾には大津波が発生して漁船をほんろうした。一隻の漁船は、八〇フィートの樹林が密生する岬を乗りこえて外海へ押しだされた。高波は部分的には一七二〇フィートという信じられない高さにまで達し、付近の森林をなぎ倒した。このツメ跡は、今日でも森林植生に一線を画し、明瞭に観察できるという。

ようやく皆が疲れをみせはじめた頃、レンジャーのエルダー嬢は、「さあ皆さん、これからクイズをはじめましょう。当った方には素敵な賞品をあげます」といいだした。出題は「さっき行った氷河の近くでの気温と海水温は、それぞれ何度だったでしょう」というものである。六月下旬ではあるが、氷河に近いだけにかなり低い筈である。乗客は思い思いの温度をいう。私たちも適当な温度を華氏に換算して答えたが当らなかった。正解は水温三十六度F（二、二度）、気温四十二度F（五、六度）とのことであった。正解にもっとも近い答をした人はグレーシャー湾の風景写真をもらい、大よろこびであった。ちょっとした座興であるが、このレンジャーのやり方は、いかにもアメリカの国立公園らしいと思った。

☆

いま振り返ってみると、アメリカの国立公園などは、国民の野外教育の場として、そしてそれがアメリカ人の自国に対する誇りを助長する一つの源泉として、きわめてよく活用されており、また国民の方も、国立公園とはそういう場所だという常識が定着しているように感じた。グレーシャー湾国家保存物は利用者が少ないせいか、ビジターセンター（レンジャーによる総合案内所兼小博物館）がなかったが他の国立公園では、ビジターセンターや解説つき自然探勝路が良く整備されている。どこにも良く訓練されたレンジャーが大勢おり、利用者の指導にあたっている。レンジャー養成の専門的研修所が二カ所にあるそうである。

日本の国立公園には改善すべきことが多いが、国立公園を野外の自然教室としてより積極的に活用することは、今後の大きな努力目標の一つであろう。

（北海道生活環境部自然保護課）